

鳥山敏子さんのこと

長田 英史



去年の秋、師である鳥山敏子さんが亡くなった。亡くなってからの数ヶ月で、こんなにいろいろ気づかせてくれる。鳥山さんはやっぱり僕の先生なんだなあと思った。

鳥山敏子さんは、30年間小学校の教員をして、退職後「賢治の学校」をつくった。豚一頭まるごと教室に持ち込んで解体して食べる授業などが話題を呼び、著書もたくさんある。

僕は学生のころ、鳥山さんの著書に出会った。豚の授業の他、スイミーになりきってイメージを探る授業などどれも魅力的で、収録された子どもたちの感想が瑞々しい。

ただ、鳥山さんの本のなかには、にわかに信じがたい、よくわからない内容もあった。竹内演劇研究所での「レッスン」の様子だ。竹内レッスンについて、今回詳しく紹介することはできないが、「からだが〇〇したがつている」というような、ひらがなで書かれた「からだ」が主語になった表現に、違和感があった。「私は〇〇したい」ではなく「からだ〇〇したがつている」って、変な表現。

著書のなかで鳥山さんは、レッスンで自分の「からだ」と徹底的に向き合い、それは家庭や教室にまで及んでいた。ボーダーレス。そして、自分のからだが変わることで、授業が変化していく様子が綴られていた。

僕が実際に鳥山さんに会ったのは、1993年の夏、伊豆の白浜海岸だった。

ある朝目が覚めると、「きょうは鳥山さんに電話をしなれば」という考えが浮かび、そのまま電話をした。鳥山さんはちょうど在宅で、僕がレッスンに参加したいと話すと「学生ですか？若いですねえ！たぶん教員ば



っかりだと思うけど、すぐに伊豆の白浜でワークがありますから、来ますか？」と、太い声で応じてくれた。

2泊3日のワークで取り組んだことを、僕は鮮明に覚えている。大人になってからの原風景みたいに。

初日の夜、鳥山さんと共にワークをリードしていた見田宗介さんから、なんの説明もなく「からだは自然に動くからそれに任せて」と言われて体験したワーク（後にそれを活元だと知る）で、「またまた、そんなバカな…」と思いつつ座っていると、からだは自然に動き出した。動きを意識すると、止まってしまう。でも力を抜くと、からだは常に僕の予想を越えた動きをした。そのとき僕は笑ってしまった。「からだは勝手に動き出すなんて、もういままでの約束事が通用しない世界に足を踏み入れたんだ！」——そう思うと、笑いがこみ上げた。雑念いっぱい活元だったが、後の僕の人生を変えた瞬間だった。僕の様子を見ていた鳥山さんは、「魚みたいに跳ねてたよ！」と言って微笑んだ。

それからの数年間、僕は鳥山さんの元に通り、自分の内側に向き合った。それにどんな意味があるのかわからなかったけど、そこには「確かさ」があった。確かにいま自分はこう感じているという、それまでの僕の生活にはない実感があった。

あれから20年以上の歳月が流れた。

僕は鳥山さんのすぐ近くで働くことも出来たけれど、それでは自分自身のことに取り組むことにならないと思い、自分の地域（東京都町田市）で活動をはじめた。当時の「賢治の学校」は建物がなく、運動体そのもの。「地域を賢治の学校に」と、思っていた。それがずっとずっと続いて、いまのれんげ舎がある。

「賢治の学校」とは、お便りをいただくくらいで、組織だった横のつながりはない。いまの世の中、みんな横のつながりばかりに気を取られて、つながることで生み出される高揚感に中毒しているように見える。僕は、水脈を共有した湖どうしのように、通底するつながりが好きだ。

周囲に合わせ、日和り、空気を読み、ジョークを飛ばし、適度にマジメな一言を吐きながら、横へ横へと広がっていく意識。置き去りにされていく本当の自分。つながろうと周

囲に向けて手を伸ばせば伸ばすほど、切り離されていくということがあるのだ。僕はそれを、身をもって経験した。ほっこり系の雑貨に囲まれていようと、オーガニックな食生活だろうと、自分が自分自身を置き去りにしては、なにも変わらない。

だれからともなく、だれにともなく、僕の内側から言葉がやってくる。

自分を信じる。子どもを信じる。他人のことは気にするな。比較そのものがネガティブで、あなたが比較した瞬間に立っているそこは、既にあなたの道ではない。

未来を予言するな。保障を求めるな。大切なものを永久保存しようと試みた瞬間、もうそこはあなたの道ではない。

知らぬ間に自分でかけた手錠を外すのだ。あの先に行けば死んでしまうよと教えられた境界線を、繰り返し繰り返し越えるのだ。

このくわたりという、底の見えない湖のなかへと、素潜りでダイブしていく勇気を、鳥山さんは僕に与えてくれた。目の前で、繰り返し繰り返し、やって見せてくれた。道に迷ったときには、畔で長い間つきあってくれた。助言が無意味なときには、ただ時間を共にしてくれた。

僕は明日、れんげ舎の子どもの活動日で、子どもたちと会う。そこでは、子どもたちと会わなかった数日間を僕がどう過ごしたかが、ありありと出るだろう。僕が僕を認めず粗末にした分だけ、僕は子どもたちを守れないだろう。逆に、僕が自分を尊べた分だけ、僕はあの子どもたちを尊重し、励まし、助言が無意味なら、ただ共に時間を過ごすだろう。

鳥山さん、ありがとう。安らかな顔だったね。僕は鳥山さんが旅立ってから、なんだか気合いが入ったよ。後ろには鳥山さんがいるような感じが、ずっとどこかであったんだと思う。うまく言えないけれど「もう、全部自分でやっていいんだ！」と思った。もっとうまくやれる人がいるから、そのときはその人をお願いしよう…そう思っていたんだなあ（なんて自分らしい発想）。

これからは、自分で自分を信じて活動すればいいんだと、最後にもう一度背中を押してくれた。一生モノの励ましをくれた。ありがとう、鳥山さん。

↑鳥山さんとの出会いかられんげ舎ができるまでを話す(三鷹) ↓